

## 森川國康先生の衣鉢

鶴崎展巨

鳥取大学地域学部

森川先生の土壌動物学における業績については他の方がふれられると思いますし、私自身もすでに他のところに書いたので（日本蜘蛛学会 *Acta Arachnologica* 誌 Vol. 58, No. 2, 2009, pp. 112-114.）, ここでは私の個人的な思い出を書かせていただきます。

私が森川先生のお名前を最初に知ったのは中2の初夏の頃（1969年）です。私はこの春頃にクモ研究への興味が高まり、1学期の間に日本蜘蛛学会（当時は東亜蜘蛛学会）に入会したのですが、最初に送られてきた学会和文誌 *Atypus* (Nos. 49/50) が岸田久吉博士の追悼号で、そこに「イヨグモのこと、学会改造論など」と題して森川先生が書かれた追悼文（これを読んで「衣鉢を継ぐ」などという難しい言葉を覚えました）や写真を見つけたのでした。さらに、その直後に買って読んだ青木淳一先生の「ダニの話」（この本はこの前年の出版です）の中の「土壌動物学とダニ」と題する一節には森川先生の研究経歴が絶妙に紹介されていました。私の家から自転車で10分ほどのところにある松山東雲短大に、クマムシやカニムシや土壌ダニのようないずれも人があまり研究していなさそうな動物（当時の私はそれらの実物を見たこともなかった）の分類の専門家がおられるということに心がときめきました。その興奮をさらに助長するように、高校3年の春（1973年）に出版された同じく青木先生の「土壌動物学」には森川先生が土壌動物の分類の開拓者として写真入りで目立って紹介されていました。初めてお会いする機会は同年の7月27日に訪れました。その当時、私が入っていた生物部（石川和男先生が同校同部の先輩とわかったのは最近です）の顧問だった上窪田康義という植物に詳しい先生から、研究のまとめ方を指導してもらおうと言われてその日の午後松山市内にある県の教育センターに連れていかれたのですが、私が持参した皿ヶ嶺（松山市南方の三角点標高1271mの山）のザトウムシの分布などをまとめたノート（生物部での研究テーマとして私が高1からやっていたものです）を見たセンターの先生（吉田という名前の、たぶん植物の染色体を研究されていた方）に、やたらと感心され、ここまでやっていたら自分ではよう指導しない、森川先生に見てもらったら、などと言われ（しめしめ）、そのあと、上窪田先生に岩崎町にあった森川先生のお宅に連れていかれました。幸い森川先生はおられ、私がザトウムシを調べてい

ると聞くと、それは奇特だと感心され、大学に置いている資料を貸してあげるからまた取りにきたらいいといわれ、8月14日の午前中に今度は一人でお宅にお邪魔し（私の家から森川先生までのお宅までは自転車で10分くらいでした。ついでながら故三好保徳先生や石川先生のお宅も10分もかからないくらいの距離です）、いろいろなお話を伺って、資料や文献を借りて帰りました。あいにくお盆で学校の図書館が休みでコピー機が使えず、早く返さないといけなそうと思い、筆写した、などと当時の日記には書いてあります。

私は、このように高校卒業までの間に青木先生の上記2冊の本に触発され、森川先生や三好先生（三好先生のことについては *Takakuwaia*, No. 28, 1996の追悼号をごらんください）といった地元に住む真正クモ以外のクモ・ダニ学者、多足類学者の存在に鼓舞されて、クモよりもっと研究者の少なそうな真正クモ目周辺の分類群への興味を深め、さらに好都合なことに松山に近い広島大学に鈴木正将先生がおられたことから自然とそちらへ進学しました（当時、大学の理学部生物学科でダニを含めクモガタ類の分類の勉強ができたそうだったのは、ここと茨城大学しかありませんでした）。これで、私は高校・大学ともに、旧制・新制の違いはありますが、森川先生と同窓ということになりました（森川先生は理学博士の学位を北大で取られたので、その点でも同じです）。

鈴木先生は森川先生の兄弟子にあたり（師匠はサンショウウオの分類やサソリの細胞学などを専門とされていて原爆で亡くなられた佐藤井岐雄博士）、研究室には「愛媛大学文理学部森川研究室」というサインが側面にある木枠の飾があり、野外実習で土壌動物を採集するときに使われていました。これは1cmくらいの網目で大小2個あり（大きい方は直径が30cmくらい、小さい方はそのなかにすっぽりと入る）、枠は曲げた板で頑丈に作られていました。素人が作ったもののように見えなかったのが、森川先生のご実家が五色そうめんで有名な森川本舗なので、小麦粉用のふるいを作るような業者に特注して作ってもらったのではないかと勝手に想像していました。動物学専攻では4年の夏休みに鈴木先生が担当する野外実習がありましたが、これが毎年、石鎚山でした。この実習は早くから石鎚山でやられ、初期には森川先生も手伝いに来られたよう

で、森川先生からコピーさせていただいた資料の中に、引率者として森川先生の名前の見える1959年のこの実習のプリント（石鎚山のザトウムシの垂直分布の図などが載っていました）が含まれていました。私が参加した1977年の夏のこの石鎚山での実習にもこの篩はたぶん持っていったと思います。私はこの篩を翌年3月鈴木先生がご退官（私も卒業）のときにいただいて、札幌、鳥取とずっと持ち歩き、つい先年まではあったのですが、昨年から今年にかけての学部の建物の耐震補強のための改修による2回の研究室の引越し作業のどさくさでなくしたようで、今探すは見あたりません。私にはこの篩が日本の土壤動物学黎明期に作られたお宝だと思われ大事にしてきたのですが、非常に残念です。

私は北大の大学院に進学したとき、ちょっとした事情があって、当時講師でおられた故伊藤立則先生から海産の動物の分類をやらないかと勧められ、一時、クマムシの研究を志したことがあります。当時は森川先生のあと、この仲間の分類研究に着手している人が皆無でニッチが空いていたし、広島大のときの原生動物の観察実習でもクマムシの実物を見ており、またもちろん森川先生が最初に手がけられた動物として、親しみがありました。クマムシには陸産種のみでなく海産種がかなりいますが（しかもこれら海産種の多くは奇抜な形をしていて見るからに楽しそう）、伊藤先生から石狩浜の砂中間隙からもクマムシが採れると聞いたことが後押しになりました。しかし、この石狩浜にバイクで何度か通ったものの、そのクマムシを私は自分ではどうしても見つけられませんでした。当時進んでいた石狩港の建設による環境変化のためかとも考えましたが、おそらく私が使ったプランクトンネット（研究室まで持ち帰った渚の砂を真水で洗ってこれで濾しとるという採集法です）の網目がクマムシ採集には少し粗すぎたらしいというのがあとから想像した原因です。いっぽう陸産種も面白いものが採集できず、これでは修士論文がおぼつかないと焦り、結局、伊藤先生からいただいた石狩浜のクマムシ標本をもとに、1新種（*Hypsibius itoi*、現在は属の細分などによって *Thulinus itoi* と変わっています）の記載論文1編（私の初めての欧文論文になりました）を書いたのみで、1年目の秋に再びザトウムシに戻りました。

私は高校卒業後、松山市との接点はたまの帰省のときだけになり、帰省時に必ず立ち寄る書店の地元出版物のコーナーでみつけた「愛媛の自然」（愛媛文化双書刊行会、松山市、1975）や「石鎚山自然観察入門」（愛媛県文化振興財団、1995）といった森川先生の著書や編著書、あるいは森川先生が日本野鳥の会愛媛県支部長として序文を寄せられた「愛媛の野鳥。観察ハンドブック はばたき」（日本野鳥の会愛媛県支部、愛媛新聞社、1992：この本は県単位

の鳥の写真図鑑としては今見ても出色の出来です）などで活躍の様子は伺われましたが、森川先生にお会いする機会はしばらくありませんでした。その後お目にかかったのは、2000年頃に相前後して実施された松山市と愛媛県のレッドデータブックの調査時の会議での数回です。どちらも森川先生を検討委員会の会長とする調査でしたが、これらに石川和男先生の計らいでクモガタ類や多足類の担当として私も加わらせていただいたのでした（これは、残念ながら、私が高校卒業後四半世紀も愛媛県でザトウムシどころかクモや多足類を専門にやる人も新たに現れなかったということを意味します）。

クモ学会誌用の訃報記事を書くときに、石川先生から参考用として森川先生の業績リストを送っていただきましたが、それを見ると、愛媛県がおこなう県内の自然環境調査のたぶんほとんどすべてに森川先生は早い時期から深くかかわられ、非常に多くの調査報告書を執筆されていたことがわかります。森川先生ほど、哺乳類、鳥類から、昆虫や無脊椎動物全般、あるいは植物まで知悉していた方はおられなかったために、行政や周囲の人たちに頼りにされたのでしょう。日本野鳥の会の愛媛県支部長を長くされていたことは知っていましたが、松山市の椿の会の会長などの肩書きもあったことは、今年（2009年）5月15日の告別式の会場で初めて知りました。告別式の間にもっと驚いたのは素鷲（そが）小学校の卒業生一同からという弔電が読まれたときでした。私はこれまで森川先生は大学教育に一貫して携われてきたものと思っていましたが、小学校（森川先生のご経歴では広島高等師範学校理科第3部3年修了の前に1939年3月愛媛県師範学校本科第2部卒業というのがあるので、おそらくこの直後）や、また、愛媛県立松山中学校（ここに勤務されたのは愛媛大学文理学部へ移られる直前）でも教鞭を執られたことがあったことを、このときに知り得ました。後者は森川先生の出身校で、その後身が石川先生や私も通った松山東高、さらに素鷲小学校も私の母校です（松山は狭い！）。

また、この告別式には前述の上窪田先生の奥様も参列されていたことを、あとで石川先生から教わりました。上窪田先生に連れられてはじめて森川先生のお宅にお邪魔したとき、電話もかけずに（これは私の勝手な思い込みかも知りませんが）急にお邪魔したような記憶があり、上窪田先生はずいぶん大胆に行動するなという気がしたものでしたが、じつは上窪田先生は森川先生や石川和男先生と親しく、よくいっしょに山などに出かけられたのだそうです。1991年に病没された上窪田先生が残した原稿を主体に森川先生らが編集・出版された「大成の自然と人文」（上窪田康義・森川國康・松井宏光編、愛媛県面河村、1996年）を昨年の夏に面河山岳博物館で見つけて入手したとき、多

少、想像はしていたのですが、よく知りませんでした。そのような人のつながりの上に、私が高校生のときに森川先生にお会いする機会も生まれたのかと思うと、いろいろと感謝しないではられません。

森川先生の業績をふりかえってつくづく驚かされるのは、その生物同定に関する守備範囲の広さです。分類研究として専門に取り組まれたクマムシ、カニムシ、土壤ダニのみでなく、それらと並行してやられていたハエやブユなどの衛生動物の群集に関する論文でも基本的な種レベルまで同定して解析されたことに驚嘆せざるをえません。同定のための図鑑や資料が充実してきた今日でも、これを一人

でやることは困難でしょう。この情熱がどこから生まれ、どうやってこれらが可能だったのか、直接にお尋ねする機会を失ったことがたいへん残念です。

私が個人的にすごく影響を受けたと思う郷土の先達のため、つい長くなりました。私より若い土壤動物学会会員で森川先生のことを知っている方は少ないのではないのでしょうか。土壤動物の分類学は、いま後継者不足が深刻であるように思います。未開の分類群の分類をつぎつぎと開拓された森川先生の行跡をたどることで、その衣鉢を継ぐ人が一人でも多く現れることを祈りたいと思います。



森川先生ご夫妻（1985年、新島溪子氏撮影）